

平成3年度 学術情報センター・総合目録

データベース実務研修 参加報告

附属図書館洋書目録情報掛

小 川 恭 弘

この長い名前の研修は、毎秋東京で4週間にわたって行われているものです。すでにご承知のとおり、全国の大学図書館等は共同で総合目録データベースの構築を進めています。その総元締めとなる学術情報センター（学情）に各大学から図書館職員が集まり研修を受けています。私は今年度の第2回の研修（91年11月11日から12月6日）に参加する機会を得ましたのでここにご報告します。

誰しも研修の前には緊張や不安を覚えるのではないのでしょうか。私は長期の研修は初めてで、しかも「かなりきつい」との前評判でした。一か月も耐えられるかと不安に思っていたところ、初日のオリエンテーションで、「第1回では研修員の皆さんから課題が大変きついと文句を言われたので、今回は甘くしました」と聞いて、ラッキー!!と安堵し、懇親会では「実際に業務を担当している人間の顔を知ってもらいたい」というお話に、そうかこの方針で行こうと急に気が楽になりました。実際、画面や活字などを通じてしか知らなかった人に会い、物に触れるのはとても大切だと実感しました。学情の係員の皆さんも私と同世代で、酒を飲めば盛り上がるし、「ガクジョウ」に対するイメージはずいぶん変わりました。

研修の日程はつつがなく進みます。いくつか印象に残ったことを書きます。内藤衛亮先生の講義では、図書館の電子化が進行するなかで、旧式になった道具や機械が全くなえりみられず処分されるが、歴史を語る文化財として保存すべきではないか、というお話に、今の大学図書館にはそんな精神的ゆとりはないようだと思います。

情報検索の講義では、既にアメリカを中心に多くの商用データベースが普及し、それぞれが膨大なレコード件数を誇っているのを見ると、私たちが毎日行っている目録入力業務のなんとちっぽけ

なことと寂しくなります。しかし、小さいことを積み重ねないと大きなものはつくられないのだと思い直してもいます。

他大学の方々と目録の話が直接できたのも収穫でした。図書館職員ってまじめだなとつくづく感じました。16人が4班にわかれ、目録業務について出された課題を討議して提出するわけですが、皆さん実に入念に検討を加えていきます。我がA班は、どんぶり勘定の私が強引に「こんなものでいいんじゃないですか」を連発したため、まことに迅速にレポートが完成し、他班の作業を尻目に打ち上げと称して飲みに出かけることができました。聞けば、第1回の方々は作業が深夜(?)に及んだそうです。早く帰れてよかったのですが、レビューの時間に他班のレポートに比べてA班のものがやけに薄いのが少々気になりました。

ところで、この学情の目録システムには、入門者向けの講習会があり、学情と各地方の大学図書館（例えば京大）で適時開催されています。昨年度から、この研修の第4週目に講習会が組み入れられ、私たち研修員がその講師役を勤めます。いわば教育実習です。これがドキドキもので、その予行演習ですらアガってしまいました。もっともそのおかげか、どんぶり勘定が効を奏したのか、本番は順調に進み、大勢の前で話すのは目立てて気分がいいものだなと一人悦に入ったりしました。受講者のアンケートのなかでもお褒めをいただき（ほとんど手前味噌）、職場に戻ってから掛で自慢している次第です。

生活面についても少しつけ加えます。ひと月も東京で暮らせてうらやましいとお思いかもかもしれませんが、楽なものではありません。初日の朝地下鉄丸の内線に乗ったらあまりのぎゅうぎゅう詰め

歩いて通いました。駅の改札口まで1分の宿にした意味が半減です。立ち食いそばのつゆはからくてまずいし。電話ボックスに12の言語で「電話機

を壊すと逮捕される」旨の警告がかかげられ、飲食店の従業員に外国人労働者が目だつのはいかにも東京だと思いました。



主題別研究集会の開催

平成3年度 近畿地区国公立大学図書館競技会の標記研修会が1月31日（金）の午後、本学附属図書館のAVホールで開催されました。

今回のテーマは「ILLシステム運用上の諸問題について」で、4月のILLシステム運用開始を前に、開発システムの概要及び構築されたシステムについて、更に理解を深めるとともに、実例を検証して、運用開始までに解決すべき問題点を明らかにすることでありました。

プログラムは、京都大学西田館長の開会の挨拶

に続いて、学術情報センター宮澤彰教授により「NACISIS-ILLシステムについて」と題して開発の考え方とシステムの概要についての講演があり、休憩を挟んで、「ILLローカルシステムの開発」について2つの報告、“ILLシステムオペレーション”、質疑応答ののち、京都大学吉岡事務部長の開会の挨拶があり終了しました。

なお、本研究集会は、近畿北部地区国立大学図書館機械化連絡委員会の共催で行われ、26大学、101名の参加がありました。

以上



附属図書館長の交代

西田龍雄館長は、平成4年3月末をもって定年退官となり、後任館長人選について、総長から商議会諮問が行われた。

「京都大学附属図書館長候補者選考規程」に基づき、2月28日開催の商議会で候補者の選考が行われ、総長に答申される予定である。

後任者の任期は、平成4年4月から3ヵ年となっている。

「京都大学附属図書館における電子ファインディングシステム」報告書作成

平成3年度 学内特別研究経費で附属図書館が実施した研究結果の報告書を作成、年度内に内外の関係者に配布の予定である。

附属図書館事務部情報サービス課が配布の窓口となり、希望者の受付を行う予定。